



横須賀市（鎮守府）

素材研究
(国内)



1871年(明治4年)に完成した1号ドックは日本最古にして現役のドライドック(艦船の修理施設)※見学は不可



現在は在日米海軍司令部庁舎として活用されている旧横須賀鎮守府庁舎※見学は不可



東京湾に浮かぶ唯一の自然島「猿島」にも砲台跡が残されています



カレーフェスティバルでも人気の「よこすか海軍カレー」



「YOKOSUKA軍港めぐり」も横須賀の定番観光素材です

自国の独立を守るための重要な海戦で歴史的な勝利を収めたことから世界の三大記念艦の一つと言われる「三笠」

海軍文化も育んだ独自の都市発展ストーリー 原点は近代造船技術の礎を築いた横須賀製鉄所

旧軍港4市が共同申請した「鎮守府横須賀呉佐世保舞鶴」日本近代化の躍動を体感できるまち」は2016年4月、日本遺産に認定されました。日本の近代化を推進し海軍文化も育んだ独自の都市発展ストーリーは、内外への積極的な情報発信により、賑わい創出や地域活性化につながるものとして注目を集めています。

構成資産で回遊性の向上に期待

呉・佐世保・舞鶴の3市とともにかつて「鎮守府」が置かれたまちとなった横須賀市は、神奈川県三浦半島中央部に位置しています。1865年(慶応元年)に建設された日本初の造船所である「横須賀製鉄所」は、日本近代化への第歩となりました。

軍港の置かれた海軍の本拠地である鎮守府が横須賀に開庁したのは1884年(明治17年)のことで、1889年(明治22年)に呉と佐世保に、1901年(明治34年)には舞鶴が開庁されました。鎮守府には常に最先端の工業技術や設備が導入され、その技術力を高める姿勢は、横須賀海軍工廠の前身である横須賀製鉄所がルーツと言われます。

横須賀で培われた技術は呉へ、そして、佐世保や舞鶴へと受け継がれ、さらには民間

企業へと移転を繰り返す中で、飛躍的な発展を遂げました。

横須賀市では、日露戦争の日本海海戦で東郷平八郎司令長官も乗艦し、連合艦隊の旗艦として大活躍した「三笠」が記念艦として保存されていますが、日本遺産「鎮守府」の認定によって、多くの構成資産も新たな観光資源として回遊性を高めるものと期待されています。

近代化への歩みを体現する景観

横須賀市経済部観光企画課では、「よこすか海軍カレー」やスカジャン、軍港めぐりなどの既存の観光素材に加えて、日本遺産の認定を追い風に旅行流動の求心力を高めていきたい」考えで、呉・佐世保・舞鶴の3市とも連携を図りながら「鎮守府」の認知度アップを目指す方針を示しています。

近代日本の海防を担ってきた4市は平和産業港湾都市に生まれ変わり、港のドックや埠頭、林立するクレーン、建ち並ぶレンガ倉庫などの景観は、近代化遺産としての歴史を体現するものです。昨年11月には東京スカイツリーで4市が一堂に会した初めてのイベントを開催するなど、首都圏から全国に向けて日本遺産認定をアピールしました。

同課では、「明治の近代化遺産が持つ歴史的背景などを後世に伝えていくうえで、旧軍港都市の日本遺産を教育旅行の平和学習における新たな選択肢の一つとして旅行商品の造成をお願いしたい」と呼びかけています。